

教育長 様

校番 033 広島県立府中 高等学校長  
( 全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る  
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校  
令和5年度 実施報告書**

**1 学校の教育目標等**

## (1) 教育目標

自己を客観的に理解し、社会における使命を見だし、進路実現に向けて、主体的・自律的にねばり強く取り組み続ける生徒を育成する。

## (2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

育てたい生徒像

- 物事を多様な見方・考え方から深く学び、将来の目標を実現できる生徒
- 主体的・自律的にねばり強く取り組み、困難な状況においても、果敢に挑戦し続ける生徒
- 他者を思いやり、他者と協働しながら、社会に貢献できる生徒

資質・能力

- 読解力、論理的思考力、表現力

## (3) 学科等の特色

普通科として教科のバランスの取れた教育課程を編成するとともに、入学時から生徒が具体的な目標を設定し、仲間と切磋琢磨しながら、学習だけでなく、学校行事や部活動、清掃等の学校生活のあらゆる場面において、主体的・自律的に取り組むことを重視している。

**2 研究の概要**

## (1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

生徒が各教科・科目等で身に付けた資質・能力を実際の課題解決に活用するために、総合的な探究の時間を核として、「探究のプロセス」を身に付けるとともに、教科・科目等の知識・技能を有機的に結び付け、外部指導者や地域人材の助言や評価を踏まえ、学年で段階的に、読解力、論理的思考力及び表現力の向上を図る。

## (2) 1年後の目指す学校の姿

難関国公立大学15名を含む国公立大学40%の合格者数の実現とともに、生徒が主体的・自律的な学習を進め、読解力、論理的思考力、表現力を身に付けることができるようサポートする学校。

## (3) 令和5年度の目標

## ア アウトプット（活動指標）

- ・3学年の総合的な探究の時間において、幅広い学問の知識・技能の必要性を自覚させた上で、自らの主張を他者に理解してもらう表現力を育成する。
- ・総合的な探究の時間と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップが作成されている。

## イ アウトカム（成果目標）

- ・マスタールーブリックを用いて探究活動の成果物（論文やスライド資料等）を評価し、表現力の資質・能力がレベル3以上である生徒の割合が60%以上になっている。
- ・模擬試験（3学年10月）の3教科（国・数・英）平均偏差値50以上の割合が36%以上になっている。

#### (4) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

##### ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

総合的な探究の時間

##### イ カリキュラム開発の概要

(マクロレベル) カリキュラム開発を受けて、マスタールーブリックの一部見直しを行った。具体的には、昨年度までのマスタールーブリックは、育成を目指す資質・能力（読解力、論理的思考力、表現力）のみを記載するものであったが、今年度の見直しにより生徒の主体性や協働性に係る項目を追加した。マスタールーブリックの見直しにあたって、文化祭や大運動会など学校行事を運営する生徒指導部と連携しており、集団における自らの役割や参画・貢献度に係る目指す姿について具体的な内容を検討した。

(ミクロレベル) 総合的な探究の時間を核として、各教科・科目等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活の中で総合的に活用できるようにするためのカリキュラム開発を行った。

具体的には、3学年生徒を対象として、本校が所在する府中市の商工会議所等と連携し、地元企業の人事担当者とともに表現力を育成する講演会を企画した。課題探究の最終段階として位置付けている探究活動報告に向け、相手に分かりやすく探究内容を説明するための効果的なプレゼンテーション資料の作成方法や、伝える相手を意識した立ち居振る舞いについて学ぶことで、学校で育成をめざす資質・能力と社会で求められる資質・能力の繋がりについて確認させた。さらに、探究活動報告では、マスタールーブリックを用いた表現力の自己評価・他者評価を行った。他者評価については、グループを設定し、生徒同士で「どのレベルに位置付けるのが適切か」を議論させる時間を設定した。他者と評価のすり合わせを重ねることで、生徒自身の評価力を高めることを狙いとした。

カリキュラム開発に係って、本校が育成すべき資質・能力について教職員全体で共通理解を図ることを目的とした校内研修を実施し、単元テンプレートをもとに各教科が定義した資質・能力とマスタールーブリックとの親和性について協議したり、育てたい資質・能力に関するイメージマップを作成したりする機会を設けた。

また、核とするカリキュラムを充実させるに当たって、1学年の「英語コミュニケーションⅠ」において、伝える相手を意識した対話表現の工夫や適切な根拠を用いた論理的な考察などについて学ぶ授業を実施した。生徒が発表内容についてルーブリックをもとに自己評価・他者評価し、改善点等を指摘し合う活動を取り入れており、総合的な探究の時間における探究課題（問い）の検証や論著・発表、評価活動に繋がる内容となっている。

##### ウ 校内体制

2 (4)イの取組について、実行委員会と総合的な探究の時間担当者が連携してカリキュラム開発を行い、11月の合同授業研究会等を通して、総合的な探究の時間の趣旨や内容等について教職員全体で共通認識を深めた。さらに、教科主任会議において、本校が育成を目指す資質・能力を育成する授業づくりや、思考力・判断力・表現力を育成する質の高い活用問題について研修し、授業で学習した内容と日常生活を関連付ける問題など、活用問題の質を高める工夫について協議した。

#### (5) 学習評価

今年度のカリキュラム開発の柱である「表現力トレーニング」については、生徒アンケートや探究活動報告における表現力評価のコメントをもとに評価を行った。

表現力育成を目的とした講演会後に実施したアンケートでは、「他者に納得してもらうためには、誰もが理解できるような言葉に置き換えたり、遠くからでも見やすいような色や文字の選び方をしたりしなければならないことに気づくことができた」、「相手を意識して発表の仕方やスライドの作り方を考えることで、さまざまな表現の中からどれが適切かを考えることができた」など、他者を意識して表現方法を工夫しようとするコメントが多くみられた。

また、探究活動報告における表現力評価では、「ルーブリックをもとに目標を決めることで、今の自分に足りない部分を確認することができた」、「他者評価を受けて、自己評価が甘いことに気づかされた」など、自らの表現力を客観的に捉えようとするコメントがみられた。

これらから、伝える相手や場面・目的に応じて表現方法を工夫することだけでなく、カリキュラムを通して表現力を客観的に捉える視点を持たせることで、生徒の表現力や評価力を向上させることができたと考えられる。

(6) カリキュラム評価

年4回実施した実行委員会において、指導助言者である県立広島大学副学長馬本勉教授とともにカリキュラム開発について協議し、その内容を踏まえ11月に校内研修会及び合同授業研究会を実施した。事後協議では、生徒を交えて、ルーブリックを用いた資質・能力の評価について協議した。生徒からは「ルーブリックを用いることで目標を明確にしたり、足りない部分を確認したりすることができる」という肯定的な意見が出た一方で、「ルーブリックの内容は理解できるが具体的な姿がイメージできない」「他者に低い評価を付けることに抵抗がある」という意見もみられた。指導助言者からは、ルーブリックを用いた評価を繰り返し行うことで評価力が育成されることや、生徒のルーブリックは試行錯誤しながら常にアップデートを続けるものであるという助言を受け、マスタールーブリックの見直しを行った。

また、定期考査において、読解力、論理的思考力及び表現力を測ることができる質の高い活用問題を全教員が作成することを目指し、教科主任会議において活用問題の工夫について研修しており、各教科会を通して授業内容と日常生活を関連付ける内容や生徒の思考力・判断力・表現力を高める活用問題について協議した。

3 令和5年度の成果及び課題

(1) 成果

・探究活動の最終段階として実施した3年生の探究活動報告（11～12月実施）について、マスタールーブリックをもとに作成した表現力の評価ルーブリックを用いて評価を行った結果を表1に示す。高校3年生が目指すレベルとして位置付けた「レベル3」以上の割合は、生徒による自己評価と教員による評価ともに、成果目標として掲げている数値（表現力の資質・能力がレベル3以上である生徒の割合が60%以上）を10ポイント以上上回っていた。

表1 表現力の資質・能力

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
生徒による自己評価	2.5%	19.1%	70.4%	8.0%
教員による評価	3.7%	25.6%	55.5%	15.2%

・探究活動について振り返りを行った際には、73.2%の生徒が「探究活動に適した探究課題（問い）を立て、検証することができた」と回答しており、その理由を分析したところ、「自分で納得のいく結論が導き出せた」「検証を通して自身が気になることや、今後のためになる力を身に付けることができたから」というコメントがみられたため、多く生徒が興味・関心を起点に「探究サイクル」を自分の力で回すとともに、探究活動に必要な資質・能力（読解力、論理的思考力、表現力）を育成することができたと考えられる。一方、「探究活動に適した探究課題（問い）を立て、検証することができなかった」と回答した26.8%の生徒の中には、「データ集めの段階で母数の数が少なく、明確な結論が出なかったから」「高校生にとっては専門的すぎて自分の力で検証できず、調べ学習に終始してしまったから」など、自分なりに「探究サイクル」のつまずきを分析しているコメントもみられた。

・模擬試験（3学年10月）の3教科（国・数・英）平均偏差値50以上の割合は41.1%であり、成果目標に掲げた36%以上を5.1ポイント上回った。この数値は、表2が示すように、過年度（過去3年分）と比較しても高い数値を示していることから、読解力・論理的思考力・表現力を育成するカリキュラム開発に一定の成果があったと考えられる。

表2 模擬試験 国数英偏差値50以上の割合(過年度比較)

2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
27.7%	37.9%	29.2%	41.1%

(2) 課題

「表現力×論著・発表」のカリキュラム評価については、3(1)が示すように一定の成果がみられたが、探究活動報告における表現力の評価において、表現力を「レベル3」に位置付けた生徒が70.4%であったのに対し、教員は55.5%と10ポイント以上も評価に開きがみられた。また、高校3年生が目指す「レベル3」に到達していない生徒が2～3割いたことに加え、生徒自身が自らの資質・能力について過大評価あるいは過小評価している状況も多くみられた。そのため、学校全体で育成を目指す資質・能力についてマスタールーブリックを示すだけでなく、各教科の学びの中で目指すべき姿について具体的な姿や場面を生徒と共有しながら評価する活動を継続させることで、教員・生徒ともにルーブリックを具体化する力や客観的に自らを評価する力とともに、より高いレベルの資質・能力を育成することができる。と考える。

#### 4 令和6年度の研究目標及び取組内容

##### (1) 令和6年度の研究目標

###### ア アウトプット（活動指標）

- ・総合的な探究の時間を核として、探究活動が各教科・科目と有機的に結び付いていることに気付かせ、幅広い学問の知識・技能の必要性を自覚させる活動を通して、生徒の読解力・論理的思考力・表現力を育成する。
- ・先輩から後輩へ探究のノウハウを継承するとともに、高い水準の探究活動に触れることを通して、自らの資質・能力を高めようとする生徒を育成する。

###### イ アウトカム（成果目標）

- ・学校の教育活動（授業や定期考査、学校行事などの特別活動等）を通して身に付けた資質・能力について、マスタールーブリックを用いて評価し、1学年は「読解力」のレベルが1以上、2学年は「論理的思考力」のレベルが2以上、3学年は「表現力」のレベルが3以上である生徒の割合が100%になることを目指す。

##### (2) 令和6年度のカリキュラム改善の内容及び校内体制

###### ア カリキュラム改善の概要

- ・開発したカリキュラム（1学年「読解力×問い」、2学年「論理的思考力×論証」、3学年「表現力×論著・発表」）を継続しつつ、総合的な探究の時間と各教科・科目との連関をいかに強化させるかなど、カリキュラム開発過程で明らかとなった課題について分析し、適宜カリキュラムの改善を図る。
- ・本校で育てたい資質・能力について全教職員で共通理解を持つために、全ての科目においてマスタールーブリックを意識した評価活動等を行う。

###### イ 校内体制

- ・教科主任会議等において、各教科で育成を目指す資質・能力とマスタールーブリックの整合性や親和性、評価活動を通して得られた生徒の資質・能力の現状や課題について協議する。
- ・各教科会において、生徒の資質・能力の現状や課題について確認し、4(1)イに示す成果目標の達成に向けた取組について協議し、各教科・科目の授業に反映させる。